



真宗新書

なぜ？
からはじまる歎異抄

武田定光

Takeda Sadamitsu

はじめに

『歎異抄』は、親鸞（一一七三～一二六二）の語録です。京都で生まれ、た親鸞は九歳で出家し、二十九歳まで比叡山で修道生活をおくりまします。その後、山を降り法然の開いた「吉水の草庵」へ向かい弟子となります。ところが朝廷と旧仏教による専修念仏の弾圧に遭い、新潟（越後）へ流罪になります。四年後に罪は許され、その後、北関東へ移り住みます。この地

で約二十年間、伝道生活をし、たくさんの弟子が生まれ、さながら教団が形成されます。しかし、六十三歳頃、生まれ故郷の京都へ戻り、著述活動を行い、九十歳で亡くなります。

『歎異抄』の著者は、親鸞の弟子の唯円ゆいえんだとされています。親鸞が去つた後の関東教団では信仰に混乱が生じ、様々な異義（異説）が生まれます。その異義を批判し、親鸞の語る正しい信心しんじんに立ち返ろうというのが執筆の動機です。

『歎異抄』には、その独特な言い回しから常識ではとうてい納得できない表現が出てきます。その都度、私たちは「なぜ？」と立ち止まります。しかし、この「なぜ？」こそが、歎異抄を読むための正攻法なのです。もし「なぜ？」と立ち止まらなければ、歎異抄への入口は開かれませんか。おおいに「なぜ？」という疑問をいただき、歎異抄の奥へ奥へと入っていただ

きたいと思います。

実は、この「なぜ？」に最初に立ち止まったのが、歎異抄の著者である弟子の唯円です。彼は七百年以上前に「なぜ？」と感じたのです。ですから、この「なぜ？」に現代の私が立ち止まるということは、自己の内面に唯円を体験することですし、仏法が釈迦しやかの成道じやうどう以来、二千五百年という時間を超えて、私に〈いま〉伝承されてきたことを証明するのです。

歎異抄の構成は、前半の十条までが親鸞の言葉を中心にまとめられ、後半の八条は、弟子の唯円が異義を批判し、正しい教えを弁証していく部分です。

一万二千字弱の短編ですが、ここに展開している信仰のエキ스는珠玉のもので、既成概念という「仏教」を超え、「宗教」という範疇はんちゆうをも超え

た新たな思想を指し示しています。これは唯円の意図したことをも超えているのかもしれませんが。もはや作者の意図を超え、救済の法則性そのものが作者を通して展開したかのようです。この救済の思想には、まだ名前がありません。とりあえず「真宗」とか「真実」と名づけているだけなのです。

よく歎異抄は、「弟子が受け止めた親鸞」（語録）で、それは本当の親鸞ではないから、親鸞の著作を読むべきだという意見を聞きます。確かに親鸞の著作を読むことは大切なことに違いありません。しかし、歎異抄には親鸞本人にはない表現があるからこそ素晴らしいのです。

それは弟子のところに受け止められた親鸞なのです。そしてこれこそが「如是我聞」（私はこのように聞きました）という仏教の正しい伝承の仕方なのです。

仏教の伝承が権威主義にならないのは、絶大な師があり、師の発言だけが正統だと考えないところです。むしろ師の教えを聞き仏弟子が誕生し、その仏弟子が師の尊さを逆に証明するのです。師の教えを受けた仏弟子は、独自の表現を生みます。また独自の表現を生まないようなものは仏教ではありません。時代に応じて表現が変わっても、その中を普遍の真実が流れていけば、それは仏説と同質なのです。

大切なことは親鸞という「ひと」が語っているから真実なのではなく、また「弟子の受け止めた親鸞」だから間違っているのでもありません。親鸞をして親鸞に語らしめたもの、弟子の唯円を通して唯円に語らしめたものこそが真実なのです。

真実は必ずひとを通してこの世に現れます。注意すべきことは、ひとに目を奪われないことです。ひとをそのように語らしめた真実にこそ着目し

ていくべきなのです。ただ、そこに真実が流れていると受け止められるかどうか、読者に問われているのです。

自分自身の直感をたよりに、さあ歎異抄の世界に飛び込んでいきましよう。

なぜ？からはじまる歎異抄

もくじ

はじめに…………… 3

序 誤解こそ理解の入り口…………… 16

第一条 信じるってなに?…………… 24

第一条前編 往生ってなに?…………… 32

第一条後編 念仏ってなに?…………… 40

第二条 なぜ悪人が救われるの?…………… 48

第四条	愛つてなに？……………	56
第五条	供養つてなに？……………	64
第六条	仏弟子つてなに？……………	72
第七条	無碍つてなに？……………	80
第八条	「はからい」つてなに？……………	88
第九条	信仰のマンネリズムとは？……………	96
第十条	義つてなに？……………	104
第十一条	二つに分ける罪……………	112

第十二条	知と信の関係……………	120
第十三条前編	宿業と運命論の違い……………	128
第十三条後編	「本願ぼこり」ってなに?……………	136
第十四条	罪滅ぼしとは?……………	144
第十五条	さとりと信心の関係……………	152
第十六条	回心ってなに?……………	160
第十七条	信仰に結論なし……………	168
第十八条	お布施と信心?……………	176

後序(二) 救いの平等性とは?……………184

後序(一) ふたつのおおせ……………192

後序(三) 親鸞を弾圧した〈常識〉……………200

おわりに……………209

凡例

- 一、『歎異抄』の原文は、『真宗聖典』（東本願寺出版（真宗大谷派宗務所出版部）発行）に依ります。なお、ルビは読みやすさを考慮して適宜追加しました。
- 一、『歎異抄』の現代語訳は、武田定光さんが中心となって作り上げた『現代語歎異抄―いま、親鸞に聞く』（朝日新聞出版）の口語訳文を使用しています。

なぜ？からはじまる歎異抄

序 誤解こそ理解の入り口

竊ひそかに愚案ぐあんを回めぐらして、ほぼ古今ここんを勘かんうるに、先師せんしの口伝くでんの真しん信しんに異ことなることを歎なげき、後学こうがく相統そうぞくの疑惑いぎようあることを思うに、幸えいいに有縁うえんの知識ちしきによらずは、いかでか易行いぎようの一門いちもんに入いることを得えんや。全く自見じけんの覚悟かくごをもって、他力たうりきの宗旨しゅうじを乱みだること莫なれ。よつて、故親鸞こしん聖人しやうじん御物語おんものがたりの趣おもむき、耳底みみそこに留とどまるところ、いささかこれをしるす。ひとえに同心行者どうしんぎやうじやの不審ふしんを散さんぜんがためなりと云々。

私が思うに、親鸞聖人がいらっしやったころといまとをくらべてみると、聖人が直接教えてくださった信心と異なることがあるのは、まことに悲しいことである。それによって、教えを学び受け継ぐ者たちに、疑いや惑いまどが起こりつつある。よき師に出遇であうことがなければ、本願念仏ほんがんねんぶつの教えには入ることができないであろう。自分の勝手な考えで、他力の教えを決して乱してはならない。そこで、亡き聖人からお聞きして忘れられないお話の要点を書き記しておこう。これは、ひとえに同じ志こころざしの求道者ぐどうしゃが陥おちいりやすい不明な点を除くためである。

『歎異抄』は親鸞没後二十〜三十年に書かれた信仰の書です。唯円という直弟子が、親鸞亡き後の信仰の混乱を歎き、ひとりひとりが本当の信心に立ち返ってほしいという願いで記されています。

『歎異抄』は、前半（序〜十条）と後半（十一条〜後序）の二部で構成されています。前半は「師訓篇」と呼ばれ、主に親鸞の語った言葉を集めています。後半は「歎異篇」あるいは「異義篇」と呼ばれ、唯円が信仰の混乱を分析し、本当の信仰のあり方を弁証していく部分です。今回とりあげる「序」には「耳底に留まるところ、いささかこれをしるす」とあり、師である親鸞の言葉が、耳の底に刻まれ忘れようにも忘れられないという感動を表しています。その意味で、『歎異抄』は大乗仏典と同じ形式を

とつています。お経はすべて「如是我聞」か「我聞如是」で始まります。私はこのように教えを受け止め、これで生きていけるようになりましとという表白です。「如是我聞」が省略されているものもありますが、意味は同じです。お釈迦様がみずから筆を執ったお経はありません。すべて、弟子たちの聞書です。つまり、師が「真実はここにあり」と力説するのではなく、弟子によって受け止められた師の教えの真実こそが「真の仏説」です。真実は一部の宗教的エリートによって独占されるものでなく、誰にいても平等に受けとることができなければなりません。この仏弟子の歴史が仏法そのものの歴史なのです。

文中の「易行の一門」とは、お念仏にすべてをおまかせする教えのことです。易行とは「難行」に対する言葉で、表面上の意味は「易しい行」です。もし難しい修行をする人間だけが救われるのであれば、仏教は特殊な

エリートだけが救われる不平等な教えとなります。山の中を駆けめぐるのが修行なら、お年寄りや体の弱いひとはできません。そこで、誰でもすることのできる平等な行という意味で、お念仏を「易行」と言います。

私も最初は、「易行」を「人間のする易しい修行」と思っていました。ところが、それは違うと『歎異抄』から教えられました。「易行とはいかなる努力も不要な行だ」と。少しの努力ではなく、まったく努力は不要なのです。そうなると、「さあこれからお念仏を称しなえましょう」と意識的に努力することも不要になり、八方塞はっぽうふさがりになりました。お念仏は恐ろしい教えです。人間が少しでも努力して念仏を称えようとする、その作為さくゐの息の根を断ち切るのです。断ち切って即座に大いなる愛に包み込みます。

人間が宗教に近づく多くの場合、誤解で近づきます。しかし、誤解を恐

れることはありません。誤解があればこそ、誤解を解いてくれる教えに出
遇^あえます。むしろ誤解がなければ、理解への手がかりはなくなりません。親
鸞は関東の門弟たちの混乱ぶりをみて、「ひとびとの信心のまことならぬ
ことのあらわれてさうろう。よきことにてさうろう」（『親鸞聖人御消息集』）
と述べています。皆さんが混乱しているのは信心が本当でないことの表れ
だから、むしろそのことがあぶり出されたのはよいことだと言っていま
す。この「よきことにてさうろう」という受け止めこそ、『歎異抄』に流
れている「歎異のころ」ではないでしょうか。